第22号　2004（平成16）年3月　　編集・発行　龍谷顕真会事務局（総局公室〈渉外・広報担当〉）

龍谷顕真会会報

もくじ

2003（平成15）年度　総会グラフ …… 2
『龍谷顕真会総会記念講演』 …… 3～15
第2回研修会グラフ …… 16
『龍谷顕真会第2回研修会』開催報告 …… 17～18
第11回海外視察グラフ …… 19
『龍谷顕真会第11回海外視察』開催報告 …… 20～23
2003（平成15）年度　会員活動報告 …… 24～27
2003（平成15）年度　事業報告、会員動静 …… 28

編集・発行　2004（平成16年）3月
龍谷顕真会事務局
（浄土真宗本願寺派宗務所
総局公室〈渉外・広報担当〉）
TEL　075-371-5181
FAX　075-371-5241

「第11回海外視察」 本派本願寺ハワイ別院にて

コラム

長寿人生
人の世は　山坂多い旅の道
節目の齢に　お迎えきたら

還暦　六〇才　とんでもないよと
追い返せ
古希　七〇才　未だく早いと
つっぱなせ
喜寿　七十七才　せくな老楽
これからよ
傘寿　八十才　なんのまだく
役に立つ
米寿　八十八才　もう少し
お米を食べてから
卒寿　九十才　年令に
卒業はないはずよ
白寿　九十九才　百才の
お祝いが済むまでは
茶寿　百八才　まだく
お茶が飲みたらん
皇寿　百十一才　そろくゆずろうか
日本一

念ずれば
花ひらく

藤谷光信代表世話人挨拶

2003（平成15）年度
総会グラフ

総　　会

武野以徳前総長挨拶

総　　会

『龍谷顕真会総会記念講演』

日時　二〇〇三（平成十五）年
　　五月二十三日　午後三時より
場所　宗務綜合庁舎三階大会議室

他力について

本願寺派 勧学　梯　實圓

ただ今ご紹介に預かりました梯でございます。このたび、このご法縁をいただきまして「他力について」という題でお話をさせていただきたいと思うのでございます。じつは、「自力」「他力」という言葉が、誤解を受ける言葉でもありまして、大変難しい問題を持っているわけでございます。一般に他力といいますと、自分は何もしないで、他人の力をあてにし頼るというような、依存的な物の考え方だというふうに受け取られているわけでございます。しかし親鸞聖人が他力といわれた時には、いったいどういう意味をこめておられたかということを今日は少しお話をしたいと思うのです。

一般に使われている「他力」が必ずしも間違っているわけじゃないんです。つまり、「自力」「他力」ということは実にさまざまな理解の仕方があるわけで、一概に一般の人たちの使い方が間違っているともいえないわけです。ただ親鸞聖人が、「自力」「他力」という言葉を使われた時には、聖人御自身の深い宗教経験をこめていわれていますから、よほど注意をして見ていかねばなりません。今日は短い時間ですが、聖人がどんな意味をこめて自力とか他力という言葉をつかわれていたかということをお話をしたいと思います。

その一つの手掛かりが、先ほど拝読しました『正像末和讃』の一首なんです。

聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして　他力不思議にいりぬれば　義なきを義とすと信知せり

（『註釈版聖典』六〇九頁）

ずいぶん難しい言葉ですね。この言葉が難しいように、実は親鸞聖人が「他力」といわれた時には、大変難しい領域を表わされているわけです。完全に人間の常識を超えた領域を表わしているわけでございますので、難しい言葉になるのです。この文章も実は顕智本、顕智上人が写された顕智本

一、鎮西浄土宗の自力他力観

聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして　他力不思議にいりぬれば　義なきを義とすと信知せり。

『正像末和讃』

（『註釈版聖典』六〇九頁）

の『和讃』を見ますと「聖道門の人はみな　自力の心をむねとせり」となっています。そして、「他力不思議に入りぬれば　義なきを義とすと信知せり」とこうなっております。どちらが推敲後のものであったかはわかりません。これは『正像末和讃』の成立にもかかわる問題なんですけれど、今日はそんなことをお話している時間はありません。いずれにしましても、「聖道門の人たちは皆自力の心を一番大切なこころとしています。けれども他力というような人間の思いのとどかない不思議の領域に入ったならば、人間のはからいを全くまじえないことこそ他力の正しい受け容れ方であると信知するようになる」といわれているわけです。

自力他力ということを浄土教に導入されたのは曇鸞大師でしたが、それ以来多くの浄土教の祖師が用いられるようになりました。ただ善導大師は用いられませんでしたが、法然上人がよく用いられた関係で、法然門下の方々は皆お使いになるのですが、実はその使い方が大きく違っているわけです。今日法然上人の門下の系統で、教団として残っていますのは、鎮西浄土宗（鎮西派）、西山浄土宗（西山派）、浄土真宗というように三つだけです。もっとも西山派の証空上人の孫弟子にあたる一遍上人の系統の時宗がありますが、教義的には西山派と殆どおなじです。ともあれこのように法然門下が別れた理由の一つに、その他力観の違いを挙げることができましょう。いいかえますと他力の理解の違いは、浄土教団が分裂するほどの意味を持っておったわけですから、これは本質的な問題だということがわかります。

まず、私たちは、「自力を捨て他力に帰する」と申しております。しかしそのようにいうのは真宗と西山派でして、鎮西派ではそういいません。鎮西派では自力と他力が相俟って救いが成立するというんです。「自力＋他力＝救い」というふうに考えていくわけです。それに対して、西山派の証空上人と真宗の親鸞聖人は、凡夫である私どもが浄土に往生することは全く阿弥陀仏の他力だけで成立するのだと全分他力説を主張しています。その中でまた両者には微妙な違いはありますが、それについては今日は触れないことにします。

まず、浄土宗（鎮西派）の自力他力観というのは、先にいいましたようにうに、自力と他力が相俟って救いが成立するというふうに考えるわけです。自力とは自分が教えに従ってこのような修行をしようと正しい判断をくだし、それにふさわしい行動を起こすことですから、それが往生成仏の因となるわけです。それを仏菩薩やさまざまなものが守り育て導いてくださるわけですから他力であり、それは往生成仏のための縁となっていくというのです。もっとも聖道門でいう他力とは、仏菩薩や諸天善神の加被力を始め、善知識の教導、信者の経済的援助までも含まれます。しかし浄土門で他力という場合には、阿弥陀仏の本願力が中心であることはいうまでもありません。こうして自力の因と他力の縁とが和合して成仏という結果が生ずるというのが聖道門であり、往生という果を生ずるのが浄土門であると見ていくのです。そもそも仏教は因、縁、果の道理を説く教えであって、浄

土宗の考え方こそ仏教の道理にかなった考え方なんだ、と浄土宗の方々はおっしゃるわけです。

この中で自力が因であるというのは、さとりの果をもたらす因は善なる行だからです。善行は正しい判断から起こってきます。仏陀の教えを聞いて、その教えの内容を正確に理解し、教えに従って私はこの道をいくと決断をして、それを実行に移していくわけです。その一番元になるのは自分の判断力です。教えに導かれて、是非・善悪を判断して、善なる行為を実行に移していく、これを意思の活動といいます。仏教では「思の心所」（しのしんじょ）といっています。「思」というのはまず、いろんな情報を分析し（審慮思）、これが正しい道であると判断し決定する（決定思）。それを言語で表現し、体に表わし、行動に表していく（動発勝思）。人間の行いの本体は、このようによく考えて決断し、そして行動に移していくわけですが、その判断をする時、右へ行くか左へ進むかは自分の自由な意思によって決断をしていきます。そういう意思決定能力があるから、決定したことに対して自分が責任を持たねばならないわけです。行が因であるというのは、そのような構造を持っているからです。

しかし因だけでは結果は出てきません。自己がおこなう行因（直接原因）と、それを助けて結果をもたらす多くの縁（間接原因）が揃わなければ結果はでてきません。その因と縁の軽重の差によって聖道門と浄土門とが別れると鎮西浄土宗では申しております。

鎮西浄土宗の派祖は、法然上人の弟子の聖光房弁長（弁阿）上人ですが、その弟子に良忠上人という学徳兼備の名僧が居られました。この方が、『決疑鈔』という書物の中に、自力の要素が強くて「他力」の要素が弱い教え、これを聖道門という。それに対して「自力」の要素は非常に弱いけれども、本願力という「他力」の要素が非常に強いから、煩悩具足の凡夫も浄土に往生させていただくことができる、これが浄土門だといわれています。譬えていえば九十パーセントの「自力」の要素と、十パーセントの「他力」の要素によって成仏すると説くのが聖道門の教えであり、十パーセントの「自力」の要素に、九十パーセントの「他力」の要素が加わって往生が成立するのが浄土門であるというのです。このように程度の違いはあっても自力と他力が相俟って初めて修行の完成があるのですから、自力を捨てて他力に帰するというようなことは原理的にあり得ないことであり、自力だけの仏法とか他力だけの仏教というようなものはないといわれるのです。ただ自力の要素が強いから聖道門を自力の教えといい、浄土門を他力の教えということはあります。だから聖道門を捨てて浄土門に入れということを「自力を捨てて他力に帰せよ」といわれることはあっても、自力と他力そのものを廃立することはありえないといっています。

浄土門では、本願を信じ念仏することが因になるわけですが、それは私がなさねばならぬことなんです。念仏することだけは最低限必要な行であって、これをしない人は阿弥陀仏と雖も救いようがない。弁阿

（弁長）上人は、西山派の証空上人などが全分の他力で救われるといっていることを厳しく批判して、「もし阿弥陀仏の他力だけで往生が可能であるというのならば、十劫の昔に、阿弥陀仏が成仏された瞬間に、生きとし生けるすべてのものが仏になっているはずである。しかし現実には迷っている者が無数におるではないか。なぜ阿弥陀仏に救済されない者がいるのかといえば、救済される資格がないからであるといわねばならないといわれています。阿弥陀仏は第十八願に、本願を信じ念仏するものを往生させると誓われているが、念仏をしないものを救うとは一言もいわれていない。他力というのは本願力であって、本願力は本願の通りに働く力であるから、念仏するものは救われるが、念仏しないものを救われるはずがない。阿弥陀仏は、どんな愚かなものでも称えられるように易行の念仏を選択されたのであるから、称えようとおもえば称えられるはずである。それを称えないのは如来に反逆しているのだから救われないのは当然であるといいうのです。

弁阿上人も、良忠上人も、南無阿弥陀仏とは「たすけたまへ阿弥陀仏」ということで、心に「たすけたまへ阿弥陀仏」と真心こめて救いを願うことが信心であり、それを口に称え表しているのが称名であるといわれていました。本願を聞いて、「南無阿弥陀仏（助けたまえ阿弥陀仏）」と称えるならば、阿弥陀仏はその念仏の衆生をよくしろしめして光明を放って摂取してくださる。そして生涯念仏を退転しないならば、臨終には約束通り来迎してくださる。その時往生が決定するといわれていました。念仏する私の力は微弱であるけれども、本願の念仏そのものには莫大な功徳がこもっており、臨終来迎の本願力は強いから必ず往生させてくださるというのです。これが鎮西浄土宗の他力観でした。

二、弥陀願力の不思議

それに引き替え親鸞聖人は、自力を捨てて他力に帰するといい、また他力不思議という言葉を用いられていました。これは自力とは人間の思議の領域で考え行動することでありますが、他力とは人間の思いはからいを超えた、如来の大悲利他のおはからいのことであって、自力と他力は思議と不思議という全く次元の違った領域を表す言葉として用いられていたことを物語っています。

ずいぶん難しいことをいうようですが、少なくとも浄土門では、自力と他力という

ことは、念仏しているという一つの事実をどう領解するかということの違いなのです。ですから念仏もしないような人間は、少なくとも浄土教でいう自力とか他力というような事柄について語る資格さえないのだと心得て欲しいと思います。

念仏しているということは、たしかに私が称えようと思って称えているのですから、私の行であると考えるのは当然でしょう。しかしそれだけしか考えられない人にとっては、念仏している殊勝な自分が見えるだけで、如来に出遇うことはありますまい。たとえその時に如来に会ったとしても、それは自分を救済してくれるようにとお願いする祈願の対象としての如来でしかありません。しかしもともと念仏するというような殊勝な心の起こらないはずの煩悩具足の凡夫の私が、念仏しようと思い、現に念仏していることは、有り得ないはずのことがあっているのだと気付いた人は、私の思いはからいを超えたところから私に働きかけて、私を念仏者に育ててくださっている如来の、不可思議な働きを感得いたします。そのとき私を念仏の衆生に育て上げて救っておられる如来に出遇います。その人にとって念仏の声は、私の声ではなくて如来が私に救いを呼びかけておられる招喚の勅命であると気付くに違いありません。原口針水和上が、

われ称えわれ聞くなれどこれはこれ
つれていくぞの親のよびごえ

と詠われたのはそのゆえでした。またそのような他力不思議の世界を詠んだ次のような古歌があります。

引く足も　称ふる口も　拝む手も
弥陀願力の　不思議なりけり

この歌を手がかりにして弥陀願力の不思議、すなわち他力不思議を味わってみたいと思います。「引く足」というのは、ご法座に向かって足を運ぶことで、つまり法座に参ってくる姿です。「称ふる口」はお念仏をしていることです。「拝む手」とはいうまでもなく阿弥陀仏を礼拝しているすがたをいいます。これを広げれば称・礼・念の三業の行になり、さらには五念門といわれるような宗教的な実践に広がっていきます。

法座に足を運んでくることは、お寺へお参りしようと自分で決断し、自分で足を運んできているわけですから、別に阿弥陀仏のご厄介にはなっていませんといえば確かにその通りです。しかしそうしか考えられない人は、自分は如来の方を向いていると思っている人ですが、じつは如来には遇えていない人なのです。その人の心には自分だけがいて、如来はいらっしゃらないからです。しかし、もしその人が、私は真実の仏法に遇わせていただこうというような立派な心は本来持ち合わせていなかったと気づき、如来の本願を聞くよりも世俗の名誉欲や財産欲の方に魅力を感ずる人間であったのに、いま図らずも仏法に遇おうとして法座に足を運んでいるのはどうしたことであろう。まことに不思議な現象である。これは「どうぞ真実を聞いてくれよ。仏法に遇う身になってくれよ」と願っていてくだ

さる如来の願力が私を揺り動かしている姿に違いないと領解するならば、その時、即座に如来に遇うことでしょう。法座に向かって「引く足」の奥に阿弥陀仏の本願力を感得するからです。

それはまた、私に仏法を聞く資格があって聞きに来ているのではない。仏法に反逆するような浅ましい生活を送っている自分に仏法を聞く資格などあるわけはない。このような聞く資格のない私が、如来にどうぞ聞いてくれよと願われて聞かせていただいているのであると領解するならば、法座で仏法を聞く以前に、すでに仏法にあっていることに気づくに違いありません。親鸞聖人が、「行文類」で「聴聞」という文字に「許されて聞く、信じて聞く」という左訓を施されたことは有名です。自分は聞く資格があって聞いているのではなく、許されてお聞かせにあずかっているのだという感動を聖人は「他力不思議」とも「本願力回向」ともいわれたのでした。

自分の行為を超えて、もっともっと大きな力が自分を揺り動かしていることを感じたときの感動を表す言葉が「不思議」だったのです。私を超えた力が、私を揺り動かして私を真実の方向に向け変えていると実感したときの驚きを「弥陀願力の不思議」といわれたのです。そのように如来が私を真実の法座へ導いてくださると感じた人は、自分の行動を通して実は自分を超えた大きな本願力を実感します。それを「他力不思議」といわれたのです。他力とは何もしないことではありません。何もしないものには他力不思議を味わうことはできないのです。忙しい時間を割いて聴聞をすることです。努めて念仏するのです。合掌して阿弥陀仏を礼拝するのです。そしてそこに如来に背いた生活を続けている無信の私を、阿弥陀仏を尊崇し礼拝するようなものに育てあげ、念仏者にしてくださった阿弥陀仏の本願力を実感するとき、限りない他力不思議に包まれている自分に気づくのです。

お念仏はそう簡単に出るものではありません。念仏は易行であるから、誰でも、何処でも称えられるといいますが、実際にはそう簡単に称えられるものではありません。小さい頃から念仏することが習慣になるような環境の中で育った人ならば、余り抵抗なく念仏するかも知れませんが、それはそれだけ育てられているからです。そうでない人にとって、いきなり念仏しましょうといわれてもなかなか称えられるものではありません。それも、仏とも法とも知らず、如来に反逆するようなことを考え、浅ましい言動を続けている凡夫に、阿弥陀仏の清浄真実の徳を讃え、広大無辺のさとりの徳を讃嘆する聖なる行為である称名をおこなうような資格などありません。そのような私が念仏するようになっているということは不思議なことなのです。称名をしているのは出来ることをしているのではないのです。する資格も能力もないものが如来に願われて、本願力に促されて行っている事柄だったのです。それは人間の行為ではなくて、如来が私にあって働いている事実だったと受け取ることを他力不思議の念仏というのです。

『歎異抄』には、親鸞聖人が、

煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします

（『註釈版聖典』八五三頁）

と述懐されたといわれています。もし念仏が人間の行為であったならば、必ず称えたことによって、自分の願いを叶えてほしいと祈るようになり、知らず知らず如来を道具のように利用して凡夫の願望を満足しようとするようになり、所詮「そらごと、たわごと」の領域に陥ってしまうに違いありません。親鸞聖人が「ただ念仏のみぞまことにておわします」といわれたとき、念仏は人間の上に顕れているが人間の行いではなくて如来の行いであると領解されたからにちがいありません。だから聖人は「もつぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ」といわれたのでした。それを他力不思議の念仏というのです。

最後に「拝む手」というのは、両手を合わせて合掌し、如来さまを仰ぐ姿でございます。人間のとるさまざまな姿勢の中で一番美しいポーズというのは、やはり、合掌でございましょう。己を去就して尊いもの、真実なるものを仰ぎ、礼拝する、そういう尊い姿勢を私にとらせてくださっているのが如来の本願力であるといわれるのです。そういう如来さまがいてくださるということ。そこに私の生と死を包んで、私を仏陀を念ずるものに育て、そして如来こそ真実であると仰ぎ、如来さまと相談しながら浄土に向かって生きるような人間に転換してくださったと喜ぶ人だけが、他力不思議を感ずるのでございます。

三、磁石の喩え

親鸞聖人が他力ということについて特別に示されたのは『教行証文類』の「行文類」でした。「行文類」というのは、如来より与えられた本願の念仏は真実の行（おこない）であり、大行であり、最勝の行であることを論証される一章ですが、そこに他力釈と呼ばれる一段が置かれて、「他力というは如来の本願力なり」といって、その内容を『論註』を通して詳しく解説されていました。もっとも解説といっても、初めに「他力というは、如来の本願力なり」といわれている以外はすべて引用文でした。しかしそれによって念仏こそ如来の本願力（他力）が私どもの上に顕現しているありさまであるということが雄弁に語られていました。そしてさらにそのような念仏こそ

唯一無二の成仏道であるということを論述するために次に一乗海釈が置かれていました。

その最後に阿弥陀仏の本願のはたらき（他力）を明らかにするために二十八種類の譬えが挙げられています。本願は、凡夫も聖者もすべてを乗せてさとりの世界に送り届ける広大無辺な大車のようなものであるとか、一切の世俗の泥に染まることのない、浄らかな蓮華のようであるとか、一切の驕慢の鎧を断ち切る利剣のようであるとか、まるで泉のように智慧の水が尽きることなくわき出ているとか、大地のように、すべての人を分け隔てなくたもち支えているというように、さまざまな譬えをもって阿弥陀仏の徳を讃仰されています。そうした譬えの一つに、

なお磁石のごとし。本願の因を吸うがゆゑに

（『註釈版聖典』二〇一頁）

というのがあります。これは大変示唆に富む譬えですので、詳しく味わってみたいと思います。

磁石が鉄を吸いつけるように、不可思議なる誓願は、本願の因を吸いつけていくといわれるのですが、その「本願の因」というのには二つのことが考えられます。第一は本願（第十八願）に誓われている往生の因である信心、念仏のことです。十方の衆生を本願を信じ念仏するものに育て上げ、念仏の衆生を光明の中に摂め取って必ず浄土に迎え取っていくという本願力のはたらきを磁石に譬えたわけです。「行文類」に行信の利益を明かされる一段がありますが、そこに、

いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまはず。ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。

（『註釈版聖典』一八六頁）

といわれていました。十方群生海とは十方のあらゆる衆生ということであり、行信に帰命するというのは、南無（信）阿弥陀仏（行）に南無する（信順する・まかせる）ということです。「われをたのめ（南無）、必ず救う（阿弥陀仏）」というおおせを疑いなく受け容れて、阿弥陀仏の救いをたのみ、救いに身を任せていくことを「行信に帰命する」というのです。その弥陀を憑（たの）む信心の行者を念仏の衆生といい、その念仏の衆生を摂取して捨てないというのが「阿弥陀仏」というみ名のいわれであるというのです。

つまり阿弥陀仏とは十方の衆生を本願を信じ念仏する衆生に育て上げ、念仏の衆生を大悲智慧の光明のなかに抱き取って捨てないという救いを表す名号であるといわれるのです。そのような阿弥陀仏の救済活動を「他力」というので、「十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまはず。ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ」といわれたのでございます。このように、十方の衆生を念仏の衆生に育てあげて、本願を信ぜしめ、念仏せしめて、摂取する活動が本願成就の阿弥陀仏であり、それを他力というというのでした。

今ここではそのような本願力の不可思議なはたらきを磁石のごとしと譬えられたわけです。

そうすると私を本願を信じ念仏するものに変革した本願力が、私をさとりの領域である浄土へ往生させ仏にしていく力なのですから、念仏しているが、往生ができるかどうか解らないというようなことは真宗ではいうべきことではありません。そのような考え方を持っている人は、本願を信ずることと念仏することは私のなすべき仕事であり、そのように為すべきことを為したものを臨終には迎えて浄土へ連れて行くのが阿弥陀仏のお仕事であり、それを他力というと考えているからです。しかし親鸞聖人は、そのような考え方そのものを自力といわれたのでした。

もう一つは本願の因とは十方世界の苦悩の衆生を指していたともいえましょう。苦悩の衆生を救って浄土に迎え取ろうと誓われているのが阿弥陀仏の本願ですから、阿弥陀仏（法蔵菩薩）に本願を起こさせたものは十方の苦悩の衆生であったといわねばなりません。そうしますと苦しみ悩むものこそ、阿弥陀仏に本願を起こさせたものですから、苦悩の衆生が本願の因由であったともいえましょう。したがって阿弥陀仏の本願力は、苦悩の衆生を離れて働く場所がありません。十方の衆生を自らの働き場所として、本願を信じ念仏するものに育て上げて浄土へ迎え取っていくことを、磁石が鉄を吸いつけることに譬えられたと見ることもできましょう。

考えてみますと二十一世紀は磁石の時代になるといわれていますが、聖人のこの譬えはその意味で時代の先端を行っているようでございます。これからはさまざまなものが磁石で動くような時代が来るらしいですね。今もすでに五百キロのスピードで走るというリニアモーターカーが実験線を走っていますから、そのうちに、大阪と東京間を一時間半ほどで結んでいく乗り物が出てきそうです。なんだか怖いような話しですが、あれは磁気の力で走る列車なのです。しかし、私はそんな高度な磁石の話はわかりません。せいぜい磁石が鉄釘を吸いつけるとか、磁石の針が南北を指すということぐらいしか知りません。親鸞聖人もそのような高度な磁気の話はご存知なかったと思います。実はこの譬えの元は『華厳経』に出てくるのですから、仏教では古くから磁石の不思議な働きに注目していたようでございます。

磁石というのは不思議な働きを持っています。鉄釘に磁石を近づけますと釘が動き始めます。もともと釘は自分では決して動かないものです。他から力を加えない限り釘は決して動きません。釘が勝手に動き回ったら大変なことになります。その動かないはずの釘が自発的に動くようになる時があります。それは磁石が近づき釘がその磁場に入ったときです。磁場の中にはいると動かないはずの釘が自分で勝手に動き出します。それも何処に向かって動くかといいますと決まって磁石に向かって動いていきます。そして磁石にくっつく訳でございます。これが磁石の働きですが、昔の人にとっては、これは不思議な現象であったと思います。私も子供の時分は、磁石で砂鉄を集め

たりしてよく遊んだものでございます。

ところで磁場に入った鉄釘が動くのは、実は鉄釘がただの鉄ではなくなっているからです。つまり磁石に変わるからです。実際磁石にくっついている鉄釘に、他の釘を近づけますとピタッとくっついてしまいますから、磁場に入っている鉄釘は磁石に変わっていたのです。実は磁石は鉄釘を磁石に変えるはたらきをもっているわけでございます。だからプラスとマイナスが引き合って磁石にくっつくようになる訳です。ということは鉄釘は、見た目にはいままで通り錆び釘であっても、折れ釘であっても、錆び釘は錆び釘のまま、折れ釘なら折れ釘のまま、そのままで磁石に変わっているわけです。磁石に変わるのは鉄の原子の配列が整然とした配列に変わるからだそうですが、詳しいことは物理の先生に聞いて頂くしかありません。何だったら電子顕微鏡ででも見せていただいたらはっきりするだろうとおもいます。

本願力が正にその磁石のようなはたらきをするわけでございます。磁石の磁気が鉄釘を磁石に変えるように、本願力は凡夫の心のうちに、阿弥陀仏の智慧と慈悲を最高の価値とする新しい価値体系を作りあげていくのでございます。法然上人は、念仏者は「煩悩をば心のまら人とし、念仏をば心のあるじとしつれば、あながちに往生をばさえぬなり」（『和語灯録』二）といい、それを承けて蓮如上人は、「仏法を主とし、世間を客人とせよ」といわれていました。念仏（仏法）を主人公とし、煩悩（世間）を客人とした、新しい精神の秩序を凡夫の心の中に造りあげていくのが阿弥陀仏の救済活動であると領解されていたのです。それが凡夫を本願を信じ念仏するものに変革していくということの意味なのです。そういう力を持っているのが本願力、他力なのです。それは私どもの精神を構造的に改革するような意味をもっているというべきでしょう。

私どもは煩悩具足の凡夫でありながら、煩悩を起こすことは恥ずかしいことであると慚愧するような心をもつようになる訳ですが、これは大変な変化であると思います。さらに如来のみ言葉こそ真実であると思うようになり、本願のみ教えを聞くことを楽しむようになっていきます。そして念仏するものになりますが、これは明らかに価値観が転換している証拠でしょう。

親鸞聖人が、念仏の行者は、臨終まで煩悩具足の凡夫に違いないが、愛欲と憎悪に揺れ続ける煩悩具足の身であることをはずべきことと慚愧して、如来のみ教えをまことと受け容れ、怨親平等の浄土を期するような精神の方向づけを持つようになっているということは、最早ただの凡夫ではなく、正定聚といわれ、真仏弟子といわれるような存在に転換せしめられているといわれたのでした。それは鉄釘が磁石と同じ性質を持ったものに変わったようなものです。そのように私たちも本質的には阿弥陀如来と同じ性質を持ったものに変革される訳です。それを仏になることに決定している正定聚の機というのです。磁石に変わっても錆び釘は錆び釘のまま、折れ釘は折れ釘のままですが、内容は違ってくるということがあります。そういうふうに価値観を転換し、

精神の秩序を転換していくはたらきが本願力、他力なのでございます。

ところで如来が凡夫を変革することができるのは、仏が自他一如の智慧をもって凡夫の実相を見抜かれるとき、凡夫は無明煩悩によって、いまはあるべからざるありかたをしているが、本来あらねばならないありかたは、仏陀としての在り方であることを見抜かれたからでした。そのことを「一切衆生、悉有仏性」とも、「如来蔵」ともいわれているのでございます。それゆえ仏は衆生を仏に変革することができるという確信をもって私どもに働きかけ、私どもを如来に向かうものに転換してくださるのでございます。それは私どもからすれば、まことに不思議なことですが、自他一如の如来からすれば、自然（自ずから然らしめる）はたらきであり、法爾（本願の法として爾らしめる）ことであり、法然（真理の必然として然らしめる）ことだったわけです。ですから他力不思議とは自然法爾と同じ意味を表していたのでございます。

もっとも鉄釘は磁場の中にいるときだけは磁石に変わっていますが、永久磁石になっている訳ではありません。磁場を離れると、磁気を失ってただの鉄釘にもどってしまいます。信心の行者であっても仏になっているわけではありませんから、もしも本願力の場を離れたならば、仏法を失い、ただの凡夫にもどってしまう可能性があります。そこで阿弥陀仏は光明のなかに摂取して、信心を護り続け、決して仏法から退転させないように護念し続けるといわれたのでした。そしてそのような「摂取不捨」のはたらきが阿弥陀仏のみ名のいわれであるということに、深く着眼されたのが親鸞聖人でした。

国宝本の『三帖和讃』の「阿弥陀経和讃」に「摂取してすてざれば、阿弥陀となづけたてまつる」といわれた、「摂取」に「ひとたび取りてながく捨てぬなり」といい、さらに「せう（摂）は、もののにぐるをおはへとるなり」という左訓を施されたことは有名です。一度念仏の行者に育て上げたものを、決して見捨てないどころか、如来に背を向けて逃げていくような者をこそ、追い求めて念仏の行者に転換して救うのが阿弥陀仏という名に込められている本願力のはたらきであると見抜かれたのが聖人だったのです。そのような摂取不捨の利益にあずかりますから、信心の行者は、凡夫のままで、必ず仏になることに決定している聖

者の仲間である正定聚の位に住せしめられるのであるといわれたのでした。『親鸞聖人御消息』第一条（七三五頁）に、「真実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す」といわれたのはそのゆえでした。

こうして私どもが本願を疑いなく信じていることも、念仏をもうしていることも、やがて仏になることも、すべて如来の本願力によってそうあらしめられていることであると領解し、それを教義として体系的に表されたのが『教行証文類』でした。「教文類」の初めに浄土真宗と呼ばれるみ教えを簡潔に、体系的に明かして、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

（『註釈版聖典』一三五頁）

とおおせられたのでした。わたしどもに浄土に往生する有様として教・行・信・証を回向し、さらに仏陀のさとりの内容である大悲利他の活動としての還相を与えて救い続けている阿弥陀仏の本願力回向のすがたこそ、他力の具体的な顕現だったのでございます。こうして親鸞聖人は、阿弥陀仏の自他一如の利他回向のはたらきを他力と呼ばれたのでした。それゆえ人間はもちろん弥勒菩薩であってもその働きを知り尽くすことはできないというので、他力不思議といわれたのでした。それは幾たびも申し上げたように、本願を信ずる力もなく、念仏する気さえも起きない愚かな私を、本願を信じ念仏するものに育てて、如来を慕い、浄土をまことの世界と慕うものにしてくださった如来の本願力を讃嘆しているのが、「他力不可思議」という言葉だったのです。

四、他力についての誤解

「他力」ということを喩えるのに、猫の他力と猿の他力を挙げられる方がありますが、これは実はヒンズー教などで用いられるもので、真宗の他力の喩えにはなりませんので注意をしていただきたいと思います。母猿が子猿を抱いて場所を変えるには、子猿が母親にしっかりとしがみつきますね。猿の子どもは生まれた時から、ものすごく強い握力を持って生まれてきます。それで行動する時には、母親の胸にしっかりとしがみついている。だから母猿は両手で抱かなくても子供は落ちませんから、手足を使ってずいぶん早く行動ができます。しかし、その時は小猿はぎゅっとしがみついていなければなりませんから、そこにはやはり子猿の「自力」が必要になります。それに対して猫科の動物は、猫がそうするように、仔猫の首のところを噛んで吊り下げて何処かへつれていきます。これは虎でもライオンでもそうですが、猫科の動物は皆そうします。ですから子どもは何もしないでただぶら下がっているだけなんです。全て親の力で運んでいきますから仔猫は全く自力を

働かさない。それを猫の他力という訳です。

この喩えは一応自力と他力のちがいがよくわかるようですが、実は真宗でいう他力は猫の他力のようなものとは全く違う訳です。それは救われたという内容が全く違っているからです。仔猫は親猫によって場所を移動させられただけで、仔猫の中身は全く変わっていないからです。これでは仏教でいわれる救いにはなりません。仏教でいう救いとは救われた人には、如来を中心とした、新しい価値観が形成され、新しい精神の秩序が与えていくことだからです。それが如来の本願のお言葉を、真実と受け入れる信心が恵まれるということの意味なのです。如来の言葉を真実と受け入れる信心は、人間に固有のものではなくて、如来から賜ったものであって、如来の心と同質の心なのです。だから、「信心の体は仏心である」といわれるのです。『正像末和讃』には、

智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし

（『註釈版聖典』六〇六頁）

といわれていました。「信心の智慧」を頂いていますから、信心の行者は正定聚の機であり、如来と等しい徳を頂いているとまで仰せられたのです。そこに信を得た人には、本質的な変革がはじまっているわけです。それが完成するのが自他一如の境地であり、怨親平等の領域である浄土なのです。

如来の秩序が私の中にとどくのは、本願をまことと疑いなく受け入れる信の一念ですから、手間も暇もかかりません。だから信は一念において定まるわけです。けれども、その受け入れたみ教えに育てられつづけるのが念仏者の生涯なのです。それは如来さまと相談しながら生きる人生なのです。人生の様々な出来事の中で、如来さまはこの場合どうおっしゃるだろうか、私の行動を如来さまはどうご覧になるだろうというふうに、何時も如来さまの教えを基準として生きていこうと勉めるのが念仏者の生活でした。親鸞聖人が『親鸞聖人御消息』のなかに、

仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし。

（『註釈版聖典』七三九頁）

とおっしゃったのがそれでした。本願力に育てられていく人には、「やうやう少しづつ」という変化があります。これは教えが、その人の生活の中で血となり肉となって育っていくありさまを表されたものでした。

それでは、今日はこれで終わらせていただきます。

第二回研修会グラフ

札幌ドーム展望台にて

登別温泉にて懇親会

記念講演　講師：殿平善彦氏

本願寺札幌別院向拝にて記念撮影

『龍谷顕真会第二回研修会』開催報告

開催日　二〇〇三（平成十五）年七月七日（月）～九日（水）
開催場所　本願寺札幌別院・札幌市内
参加者　二十三名

日　程

期日	時間	行事内容	会場
7月7日（月）	14：00	受　付	札幌別院ホール前
	14：30	開会式　・勤　行「讃仏偈」 （調声：梅谷世話人　司会：荒木世話人） ・挨　拶 （札幌別院輪番・藤谷代表世話人）	札幌別院本堂
	15：00	講　演　・講　題：「念仏者と社会」 －朝鮮人強制連行 ・強制労働の歴史に学ぶ－ ・講　師：殿平善彦 （北海道教区空知北組一乗寺住職）	札幌別院ホール 講師控室：応接室
	16：45	オリエンテーション	研修会日程説明等
	17：00	＜移　動＞ （JRタワーホテル日航札幌へ）	バス移動 JRタワーホテル日航札幌
	18：15	＜移　動＞（サッポロビール園へ）	バス移動 講師・輪番・教務所関係者タクシーで移動
	18：30	懇親会	サッポロビール園 講師・輪番・教務所関係者現地で合流
	21：00	＜移　動＞ （JRタワーホテル日航札幌へ）	バス移動
		JRタワーホテル日航札幌着　＜宿泊＞	JRタワーホテル日航札幌 住所：札幌市中央区北5条西2丁目 JRタワー内 TEL：011－251－1510
7月8日（火）	7：00	＜移　動＞（札幌別院へ）	バス移動
	7：30	お晨朝参拝 ・勤　行「正信偈」 ・脇谷副輪番（別院の沿革について説明）	札幌別院本堂
	8：20	＜移　動＞ （JRタワーホテル日航札幌へ）	バス移動
	9：30	※9：30　ロビーに集合 ※荒木行也・邦江別行動、登別温泉で合流	JRタワーホテル日航札幌
		札幌市内視察 大倉山シャンツェスポーツミュージアム	
		キタラコンサートホール	
	12：30	昼食：北のグルメ亭 札幌ドーム等	※バス移動
	18：00	登別温泉着　＜宿泊＞	登別温泉「第一滝本館」 住所：登別市登別温泉55番 TEL：0143－84－3322
	19：00	夕食	
	21：00	終了予定	
7月9日（水）	9：30	解散	朝食：旅館
		＜移　動＞（千歳空港行）	バス移動
	10：30	千歳空港着	千歳空港
		空港到着後解散	

第二回研修会レポート

地方研修会のお礼

札幌市議会議員　柴田薫心

第二回の地方研修会を札幌で開催させていただいた。遠方なので参加者数を心配していたが、皆様のご協力で多くの方にご参加いただいた。天候にも恵まれたが、満足して頂けたかどうかは別にして、当番地区として感謝に堪えない。

この春の選挙で北海道に六人の新人議員が誕生した。その方々が顕真会に入会して頂ける縁になればと声を掛けたが、新人議員であるが故にこの度の研修会への日程調整が難しく少数の参加者にとどまった。地方議会にも、顕真会の目的が広がればと念じている。

さて、研修会は二日間に亘り開催された。

一日目は札幌別院で、朝鮮人強制労働の歴史について一乗寺住職　殿平善彦師に遺骨返還問題を取り上げて講演をいただき、その夜は講師・輪番を囲んで、札幌ビール園で歓迎ジンギスカンパーティーを開いた。

宿泊は、札幌駅に平成十五年六月にオープンした三八階建てのJRタワーホテル日航札幌に宿泊して頂いた。このホテルは札幌市内を一望でき皆さんに喜んでいただけた。

二日目は市内の施設見学をしていただいた。初めに冬期オリンピックで有名になった、大倉山ジャンプ場とスキー歴史館を見学。続いて、世界でも有数と言われているキタラ音楽堂を見学し、その後、天然芝を入れ替えることで野球・サッカーの両方の試合ができる(ホヴァリングサッカーステージ)世界初の全天候型札幌ドームを見学していただいた。

各会場で市の職員に案内説明いただき、参加者にも要所に関心をいただく内に見学を終えることができましたこと有難く思います。その夜は登別温泉で一番大きいと言われている第一滝本館に宿泊、和やかな雰囲気の中で懇親会を開き、翌朝、千歳空港にて解散。無事終了したことに感謝致しお礼申し上げます。

第二回龍谷顕真会 研修会に参加して

北見市議会議員　櫻田正弘

「愚行信を獲ば　遠く宿縁を慶べ」浄土真宗は「ご縁をよろこぶ」宗旨であります。本年の研修会は　たまたま人口一八三万の日本のパイオニア都市、札幌市で行われました。

私は三十二年前初めて議席を得て、龍谷顕真会の総会に二度参加させていただいてから、ずっと会員でありながら研修会にも参加ができなかった事、申し訳なく思っていました。北海道で開催されたこともあって、妻も一緒に参加させていただき誠によかったと感じています。

この研修会は、それぞれの自治体で多くの檀信徒の方々にお育ていただきながら、住民福祉のお役に立てることの慶びを共有できることを感じた三日間でありました。最後の懇談会の中で、選挙や政治活動の中で、共に苦労していただいている坊守さん(私は住職ではないので、妻は坊守ではないが)の会を設立し、共に参加する事にしようとの発議があり、これからの龍谷顕真会の新しい発展に希望を抱いたのは、私一人ではなかったと思います。これからも、地方自治の発展の為に、御同朋御同行の歩みを進めようではありませんか。

最後に大変お世話になった、札幌市の元議長柴田薫心氏と札幌別院の方々に心から御礼を申し上げます。

強制連行・労働に思う

東員町議会議員　山田眞澄

七月上旬の北海道では最も気候のよい時期に、柴田札幌市議のお手を煩わしての第二回龍谷顕真会の研修会が行われました。これまで、今度が最後の参加を繰り返していた坊守と二人で参加いたしました。

地方市議の御膳立ては素晴らしく、全く初めての所へご案内いただきました。スキージャンプの大倉山シャンツェ・キタラコンサートホール(これは立派すぎて田舎の町の参考にはならなかったのですが)札幌ドームなど、余生短い私には二度目の機会はなかろうと感じました。

殿平善彦講師の朝鮮人強制連行・強制労働の実態の掘り起こし運動についてのお話に心が痛みました。朝日新聞夕刊の柳美里の小説「八月の果て」で、炭鉱から逃げ長く山中に隠れ住んだ中国人労働者の話を併せて考えました。また北朝鮮による拉致問題も重なり、被害者の立場に立った、第二次世界大戦中の日本の姿勢を厳しく反省することが、まだまだ十分でないことを思い知らされました。炭鉱のみならず、軍事施設での強制労働の事実を更に掘り起こす運動があってしかるべしと思いました。

第十一回海外視察グラフ

結団式（関西国際空港）

ハレアカラ火山山頂にて

マカワオ本願寺参詣

ワイレア・マリオット・アン・アウトリガーリゾートにて

開教使の先生方を招待して夕食懇親会

『龍谷顕真会第十一回海外視察』開催報告

開催日　二〇〇四（平成十六）年二月二日（月）～七日（土）
視察先　ハワイ開教区（マウイ島・オアフ島）
視察団　十七名

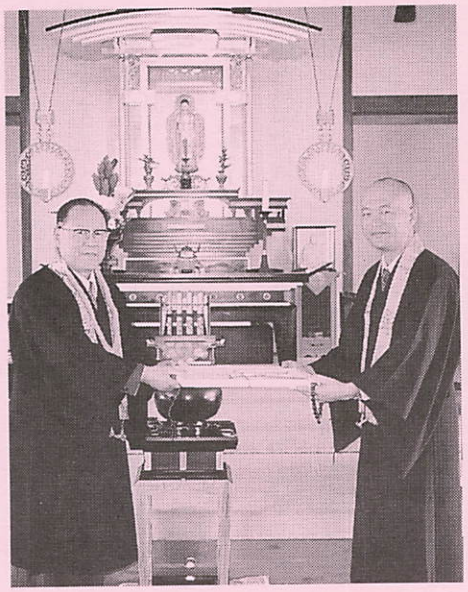
日　程

期日	地名	現地時間	交通機関	内容	備考
2月2日（月）	関西空港	17:00		団員集合	
		17:15		《結団式》	
		19:00	NH7058便	関西空港発	
	ホノルル	7:05		ホノルル着　※柴田会員合流	
	ホノルル	10:01	HA112	ホノルル発	朝：機内
	カフルイ	10:38		カフルイ着	
	（マウイ島）	11:10	専用バス	《カフルイ本願寺》参拝	昼：レストラン
				※案内:曽我大円先生	〈トロピカルプランテーション〉
		13:00		《ワイルク本願寺》参拝・茶話会	
				※案内:曽我大円先生	
		15:30		ホテル着	夕：ホテル（ルアウショー）
				ワイレア マリオット アン アウトリガーリゾート（マウイ島）	
2月3日（火）	マウイ島			終日：マウイ島視察	
		8:00	専用バス	ホテル出発	朝：ホテル
		10:15		ハレアカラ火山	
		12:50		《マカワオ本願寺》参拝・茶話会	昼：レストラン
				※案内:小畑ロナルド先生	〈クラロッジレストラン〉
		15:00		マウイ郡長との面会	夕：ホテル
		16:40		ホテル着	（夕食懇親会）
		18:30		夕食懇親会	
				ワイレア マリオット アン アウトリガーリゾート（マウイ島）	
2月4日（水）		6:30	専用バス	ホテルより空港へ	
	カフルイ	9:04	航空機	カフルイ発	朝：ホテル
	ホノルル	9:38		ホノルル着	
			専用バス	ホノルル市内視察	昼：レストラン
		10:00		真珠湾	
		11:20		《本願寺ハワイ別院》参拝・茶話会	
				※案内:牧野繁徳輪番	
		14:00		《パシフィック ブディスト アカデミー》視察	
		15:00		市内観光（ヌアヌパリ・市内）	
		16:00		ホテル着	
				ハイアット リージェンシーワイキキリゾート（ホノルル）	
2月5日（木）	ホノルル			終日：自由行動	朝：ホテル
				ハイアット リージェンシーワイキキリゾート（ホノルル）	
2月6日（金）	ホノルル	6:00	専用バス	ホテルより空港へ	
		7:00		ホノルル着　※柴田会員別離	朝：ホテル
		9:05	NH7057	ホノルル発	昼：機内
				（機　中）	
2月7日（土）	関西空港	14:00		関西空港着	
		14:30		《解散式》　※終了後解散	

海外視察レポート

ハワイ視察報告

山口県議会議員　藤谷光信



龍谷顕真会の皆さんと共にハワイを視察に訪れた。二月二日関西空港から、本山の総局公室（渉外・広報担当）の部長さんをはじめ、職員の方のお見送りをうけ総勢一七名。

ハワイはご承知の通り日系人の多い州である。その中でも、特に本願寺の門徒が多く、ハワイ別院に象徴される「ホンパホンガンジ」の呼び名でハワイ州の人に浸透している。

今回は、特にマウイ島の本願寺とホノルルのハワイ初の仏教系高校を中心に視察研修した。マウイ島のカフルイ本願寺では広島県出身の曽我大円開教使ご夫妻と門徒の方の歓迎を受け、本堂にて礼拝の後、実情報告を受けた。また、マカワオ本願寺でも、小畑ロナルド開教使ご夫妻のお話を聞き、現在のハワイの様子や、三世、四世の時代に入って、ほとんどが英語での布教となったことなどを聞いた。また、小畑開教使は地域社会によく関わっておられマウイ郡の郡長（メイヤー）との会見を準備していただいた。四十代の若いメイヤーがマウイ島の水道の完備や、パイナップルと砂糖キビの農業生産について、熱く語られ、友好の内に郡長室での会見、会談は終わった。

ホノルルでは、本派本願寺のハワイ別院輪番の牧野繁徳氏から、最近のハワイの実情を聞いた。開教使のご苦労や門信徒の礼拝の様子などを聞き、参加者一同感銘をうけた。

マウイ郡長アラン荒川氏と記念撮影（ワイルク市庁舎にて）

引き続き、牧野輪番の案内で、昨年九月開校されたパシフィックブディストアカデミーを訪れ、トヤマ校長から実情を聞いた。一年生十八名だけの誕生したばかりのアメリカ初の本派系の高校である。

体育館では和太鼓の練習、クラスルームでのパソコンの授業を見学した。生徒はみんな明るくて、熱心な子ばかりだ。先生も意欲に燃えている。まだ新設の校舎が無いとのことで、参加者がそれぞれ自発的に寄付を申し出て、校長から感謝されていた。私も団長として、皆さんの善意に感謝した。

二月七日には、全員無事に関西空港に帰り、本山の職員の皆さんのお出迎えをうけた。

今回の研修視察はハワイの行政官と直接面談したこと。ホノルルの本派系の学校での教育事情、視察、マウイ島での開教の様子や、高齢者への福祉事情など、短期間だったが、実に有意義な実り多い視察となった。

関係各位の皆さんに心からお礼申し上げます。

第十一回海外視察に参加して

高田町議会議員　荒木行也

龍谷顕真会でハワイを視察するのは三回目ですが、その内、私が参加したのは今回で二度目となります。（以前は、十一年前にホノルルへ）

今回はホノルル空港着後、そのままマウイ島へ行き、「ワイルク本願寺」を参拝した。その後「カフルイ本願寺」を訪問したが、現地の皆さんは、時代の流れで二世三世の方ばかりで、日本語が話せない方が多くなってきているとのことでした。

二日目は、ハレアカラ火山（三，〇五〇メートル）に早朝から登り、世界最大の休火山の頂上からの眺めは絶景で、ハワイ島が見え、また、山頂に雪が見えたのに驚きました。

午後には、マカワオ本願寺を訪問参拝させていただき、その後ワイルク市庁舎表敬訪問を行った。マウイ郡長（メイヤー）さんは、荒川さんといって日系三世の方でしたが、やはり日本語が話せなく、マカワオ本願寺の小畑さんが通訳して下さいました。

三日目は、カフルイ空港からホノルルへ着後、本願寺ハワイ別院へ訪問参拝に参り、懇親会を催して頂いた。午後は、パシフィッ

クブディストアカデミーを訪問の後、ホノルル市内視察、ヌアヌパリ、パンチボールの丘等を視察した。

四日目、自由行動でしたので、私達はハワイ島を訪ねる事にした。この島は移民をした日本人が開拓をしたとのこと。今も活火山がありビデオで放映している。ハワイ諸島は砂糖きびとパイナップルが主産物であったが、今は砂糖会社が休んでいるとのことだった。

人口はハワイ全島で140万人、その内オアフ島に90万人が住んでいるとのことだった。

マウイ島で村上利男先生(ワイルク本願寺の駐在開教使)にお会い出来ることを楽しみにしていたが、日本に帰国されているとのことで残念だった。

龍谷顕真会第十一回海外視察旅行

豊浦町議会議員　片山　隆昭

二月二日、参加者一七人にて四泊六日のハワイ旅行に行きました。厳寒の日本を後に常夏のハワイへ、ホノルル空港着、ハワイアン航空に乗り継いでマウイ島へ、直ちにワイルク本願寺に参詣後、カフルイ本願寺に参詣、そこで懇談会を持って頂き、移民の方々のご苦労話を聞きました。マウイ島ハレアカラ火山（三〇五五メートル）にバスにて登山、素晴しい。クレーターを眺め、別天地を感じました。

マウイ島(人口十一万五千人、面積は香川県と同等)の郡長（市長）アラン荒川氏より名刺を頂き、名刺に「更によいコミュニティー」と記されていた。荒川氏は、太平洋戦争のため、日本語を話すことを禁じられ、日本語学校も閉鎖されたと語られた。昔から「言葉が失われると国亡ぶ」といわれているが、日本も言葉を大切にしたいと思ったことであります。

市のバッジが素晴しい「ハワイ州マウイ郡太陽の光」影のない政治行政を意味するとのこと感激する。

二泊後、オアフ島ホノルルに渡り、ハワイ別院参詣、戦後五十八年にして初めて設立された仏教系高等学校パシフィック・ブディスト・アカデミーを見学させていただきました。

続いて、パールハーバーに足を運び、戦争の悲劇を感じ涙したことです。日本人一、二世のご苦労を思う時、開教使の努力、苦労を強く感じることでした。開教寺院は三十五ヶ寺との事で三百～四百名のメンバー(門徒)で維持拡大努力されている姿に今一度感激。

宗門の自覚努力改革を強く感じる。

「念仏の声を世界に子や孫に」

合掌

二〇〇三（平成十五）年度 会員活動報告

会員四十二名のうち二十七名より「活動報告書」の提出がありました。
尚無記入箇所は掲載いたしておりません。

① 議会役職
② 所属委員会・役職
③ 地域団体役職
④ 所属党派・役職
⑤ 本年度取り組んでいる事項並びに今後取り組みたい課題

柴田　薫心　札幌市議
北海道・札幌・宝流寺前住職
①自民党第2議員会会長
②厚生委員会
③札幌観光議員連盟会長
④自民党
⑤行財政改革と雇用促進

亀井　義昭　中川町長
北海道・上川北・極楽寺衆徒

谷口　隆徳　朝日町議
北海道・上川北・常徳寺
②総務文教常任委員会副委員長
朝日町合併問題調査特別委員会委員
④無所属
⑤地方行政及び地域の活性化の推進
教育及び福祉（老人）医療問題への取組み

芳滝　仁　幕別町議
北海道・十勝・顕勝寺

櫻田　正弘　北見市議
北海道・北美東・本覚寺衆徒

萱森　眞雄　横手市議
東北・秋田・専光寺衆徒

花木　肇正　大島町議
高岡・射水・称念寺住職
①総務常任委員・監査委員
②総務常任委員会・法定合併協議会委員
③射水地区広域圏事務組合議会第2委員長
監査委員
④自民党・大島町支部幹事長
⑤理解のできる合併のあり方・対等の意味・特別債の利用（合併前と合併後）

嶋田　政憲　勝山市議
福井・福井・本覚寺衆徒
①勝山市議会議長
②総務文教委員会・越前鉄道対策特別委員会・市町村合併対策特別委員会
③中部役員自動車道促進対策委員会
中山林道愛護組合組合長
④無所属
⑤国の高規格道路見直しに反対し地域活性化のため中部従貫道を強く推進する
高齢化社会における特別養護老人ホームの不足の充実増圧の推進
青少年の非行化防止の対策

井上　馨　勝山市議
福井・円陵・厳教寺衆徒

中田　宗人　明宝村議
岐阜・郡上・圓光寺住職
①明宝村議会議長
②総務文教委員・観光開発特別委員
③郡上郡広域合併特別委員・郡広域連合議会議員・明宝高原開発K．K取締役
④無所属
⑤平成十六年三月広域合併予定のため現地

域の一層の活性化と従来の各種政策等の効率的実現・少子高齢化対策と環境問題

横山　善道　山県市議
岐阜・黒野・金證寺住職
②総務委員会委員長
③山県交通安全協会伊自良支部長
山県市体育協会副会長・山県テニス会長
④無所属
⑤平成十五年四月一日新市「山県市」の発足に伴う都市計画と特例債の活用

寺本　克磨　川越町議
東海・朝明・法雲寺衆徒
②議会運営委員副委員長
総務建設常任委員会委員
議会だより編集委員会委員
③三重郡老人福祉施設組合議員
社会福祉協議会監査委員
④無所属

山田　眞澄　東員町議
東海・員弁・浄源寺住職
②経済土木常任委員会
③無所属

大塚　泰雄　安曇川町議
滋賀・高島・通安寺住職
②総務民教常任委員会委員長
基地対策特別委員会副委員長
③高島郡仏教会幹事(事務局長)
④無所属
⑤高島郡内五町の合併について法廷協議会で検討中。

北川　眞道　秦荘町長
滋賀・愛知上・浄甫寺
②滋賀県町村会長
③秦荘土地改良区理事長
秦荘町社会福祉協議会会長
秦荘町農業委員会長
④無所属
⑤市町村合併の促進
福祉の充実・教育の振興

黒田　昭信　滋賀県議
滋賀・犬上南・教得寺住職
②環境・農水常任委員会
少子高齢化対策特別委員会
③部落解放基本法制定運動彦根犬上実行委員会委員長
④自民党
⑤環境・自然保護　森林保全と水源涵養
青少年教育・寺院での日曜学校の実施

山本　隆俊　茨木市議
大阪・茨木東・称名寺住職

波多　正文　尼崎市議
兵庫・阪神南・正光寺住職

谷川　正秀　尼崎市議
兵庫・阪神西・万徳寺住職

窪田　享信　温泉津町議
山陰・大家・願林寺住職
②議会運営委員会副委員長
総務常任委員会
③部落解放人権政策確立要求島根県実行委員会会長
④無所属
⑤市町合併が進む中、周辺地域への配慮を求めて行く

竺川　紹隆　金城町議
山陰・福屋・浄光寺住職
①総務委員長
②総務委員会
③社会福祉法人　寶林会理事長
④無所属
⑤合併問題

小原美智子　美都町議
山陰・三隅・妙蓮寺衆徒
②総務委員会
③町連合婦人会会長・女性団体連絡協議会会長・町消費者問題研究協議会会長
④自民党・女性部長
⑤高齢者問題・環境問題

藤谷　一剣　匹見町議
山陰・益田・蓮長寺住職
②文教警察委員会
③山口県演劇協会会長・岩国市文化協会会長
山口県私立幼稚園協会理事
④民主党

大前　寛乗　坂出市議
四州・飯山北・善光寺住職
②教育民主委員会
③自治会副会長
④自民党
⑤地域の商店街活性化事業
地域の児童や老人のために「いきいきとした街づくり」の支援事業に取り組む

藤谷　光信　山口県議
山口・岩国・教蓮寺住職
②文教警察委員会
③山口県演劇協会々長
岩国市文化協議会々長
山口県私立幼稚園協会監事
④民主党

米沢　痴達　周南市議
山口・熊濃・真光寺
②環境教育委員会
③無所属

島田　明　山口県議
①山口県議会議長
②総務企画委員会
③山口県保育協会常任理事・防府市保育協会会長・学校法人島田学園中関幼稚園理事長
社会福祉法人防府滋光会理事長
防府市立華陽中学校後援会長
④自民党
⑤市町村合併・少子化対策・地産地消運動

弘中　正俊　防府市議
山口・防府・乗円寺住職

久保　玄爾　防府市議
山口・防府・信行寺住職

秋里　勝道　美東町議
山口・美祢東・明楽寺住職
①監査
②経済建設委員
③環境衛生推進協議会役員
④無所属
⑤高規格道路・合併問題

川越　正信　美祢市議
山口・美祢西・西音寺衆徒

片山　隆昭　豊浦町議
山口・豊浦西・心光寺住職
②文教厚生委員会委員長
ひびきくらぶ副会長
⑤市町村合併についての研究

井上　隆純　豊浦町議
山口・豊浦西・正音寺住職
①議長
②総務委員会
③まちづくりグループ「発揮会」会長
④無所属
⑤市町村合併（一市四町）の推進と合併への住民意見の反映・医療福祉行政の拡充・地域経済の振興、道の駅づくり

荒木　行也　高田町議
福岡・三門南・阿弥陀寺住職
①瀬高町外二町消防組合議会議長
②産業建設常任委員

③福岡県保育所連盟副会長
④無所属
⑤合併問題について

谷川　通澄　大和町議
福岡・三門北・至徳寺住職
①議長
②文教厚生常任委員会
③福岡教区教誨師
④無所属
⑤市町合併問題・有明海再生について
国道二〇八号渋滞解消について
教育問題について

志賀　信之　朝地町議
大分・岡・西蓮寺住職

傍示　暢昭　佐賀市議
佐賀・巨瀬・正見寺住職
①政清会会派代表
②議会運営委員会副委員長・福祉生活常任委員
③兵庫町防犯協会・宝正幼稚園理事長
④無所属
⑤少子超高齢社会の到来に向けて力強く生きていく子供の育成
高齢者福祉の充実・環境問題への対策

片山　正純　諫早市議
長崎・諫早・明教寺住職

隈部　弘正　菊鹿町長
熊本・山鹿・光厳寺住職

長嶺　興也　中央町長
熊本・益南・善林寺住職

佐々木一法　五和町議
熊本・天草下・西明寺住職
③老人会顧問
④無所属
⑤平成十七年一月の天草市合併に向けて

崎田　要司　清武町議
宮崎・宮崎・長明寺住職
①土地開発公社理事
②議会運営委員会委員長
総務常任委員会委員
③スポーツ少年団本部長・体育協会理事
スポーツ振興審議会委員・県柔道連盟理事
④自民党・清武町青年局長
⑤青少年健全育成・教育、文化、スポーツの振興
生活環境の整備促進・少子化、高齢化対策の推進

龍谷顕真会役員

二〇〇三（平成十五）年度総会において、任期満了に伴う龍谷顕真会役員（世話人・会計監査役）の改選が行われました。
第一ブロック～第三ブロックに分かれ協議し選出されました役員は次の方々です。

代表世話人
藤谷　光信（山口県議）

世話人
第一ブロック（北海道～大阪）
山田　真澄（東員町議）
梅津　正純（山東町議）
第二ブロック（兵庫～山口）
山本　隆俊（茨木市議）
竺川　紹隆（金城町議）
秋里　勝道（美東町議）
第三ブロック（九州）
荒木　行也（高田町議）
傍示　暢昭（佐賀市議）

会計監査役
柴田　薫心（札幌市議）
花木　肇正（大島町議）

二〇〇三（平成十五）年度 事業報告

二〇〇三（平成十五）年

五月十六日（金）
会計検査
第一回世話人会

五月二十三日（金）
第二回世話人会
総会

〈記念講演〉
講師　梯實圓（本願寺派勧学）
講題　「他力不思議」

〈懇親会〉
会場　二傳

七月七日（月）～九日（水）
第二回研修会
視察先　本願寺札幌別院・札幌市

二〇〇四（平成十六）年

一月十四日（水）
第三回世話人会

一月十五日（木）
御正忌報恩講参拝

二月二日（月）～七日（土）
第十一回海外視察
視察地　ハワイ開教区（マウイ島・オアフ島）

会員動静

〈退会会員〉

松井靖典　前河合村長
梅津正純　岐阜・飛騨・願教寺住職
小泉玲子　前山東町議
藤本和人　滋賀・山東・寶安寺住職
熊谷宗圓　前御津町議
兵庫・網干・浄泉寺衆徒
前市川町議
兵庫・神崎・妙楽寺
前岩国市議
山口・岩国・西福寺住職

〈新会員〉

谷口隆徳　朝日町議
芳滝仁　北海道・上川北・常徳寺住職
亀井義昭　幕別町議
北海道・十勝・願勝寺住職
大前寛乗　中川町長
北海道・上川北・極楽寺衆徒
坂出市議
四州・飯山北・善光寺住職

龍谷顕真会事務局より

「龍谷顕真会結成三〇周年記念式典」開催について

二〇〇四（平成十六）年は、龍谷顕真会が結成されてから三〇周年の節目を迎えることとなります。

つきましては「龍谷顕真会結成三〇周年記念式典」を開催いたします。会員各位におかれましては、どうぞご出席賜りますようご案内いたします。追って、詳細についてご案内申し上げます。

開催日　二〇〇四（平成十六）年五月二十八日（金）
会場　西本願寺（予定）

会費・特別会費納入のご依頼

年会費　五、〇〇〇円
特別会費　一〇、〇〇〇円（当選年次）

会費・特別会費未納の方は、事務局までご連絡の上ご納入くださいますようお願いいたします。ご不明の点がございましたら事務局までご連絡下さい。

会員加入促進のご依頼

地方自治体の首長・議員に公選された宗派の僧侶の方で本会に未加入の方をご存知でしたら、加入ご推奨いただくとともに、事務局までご連絡下さい。

公職選挙宗門推薦について

今後、選挙の施行があり立候補を予定されている方は、宗門推薦をいたしますので事務局までご連絡下さい。

『龍谷顕真会会報』（第二十二号）二〇〇四（平成十六）年三月発行　編集・発行　浄土真宗本願寺派総局公室〈渉外・広報担当〉内　龍谷顕真会事務局